



Title	月待ちの意匠 : 銀閣の設計手法における東山文化の美意識
Author(s)	大森, 正夫
Citation	デザイン理論. 2015, 66, p. 76-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56267
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

月待ちの意匠

— 銀閣の設計手法における東山文化の美意識 —

大森正夫／京都嵯峨芸術大学

はじめに

室町文化、とりわけ東山文化は日本の諸芸術に多大な影響を与え、今日の日本人の美意識や趣味の形成において極めて大きな存在である。東山時代とは、室町幕府第8代将軍足利義政が東山山荘へと移住してから没するまでの短い期間（1483～1490）であるが、それは義政の思想に基づいた芸術文化が大きく発展した時代に他ならない。

特に、現在でも継承されている連歌俳諧、茶の湯、いけばな、聞香、能楽、床の間、畳間、築庭、精進料理など、諸処の文化活動に新鮮な局面を開いたものの多くは東山文化を代表するものである。そして、「わび」「さび」「幽玄」などを特徴とする表現には、主観的象徴性が潜み、その神秘的な言説や資料の不足などによって東山文化の発信源である東山殿（遺構としての「銀閣とその苑池」）の意匠学的研究は乏しく、国宝・銀閣の建立意図させも解明されていない。

本報告は、東山文化が発祥した地である東山殿の遺構・観音殿（通称：銀閣）と苑地を取り上げ、そこでの設計手法を月の軌道分析や東山文化特有の美意識や習慣（作法）から空間構成の意匠と空間美について解説する。

研究の背景

2010年、東山慈照寺に建つ銀閣が、創建以来はじめてとなる3年がかりの解体修理に伴う発掘調査を終えた。

この調査によって、創建時の可能性のある室町時代ごろの整地層と、銀閣を囲むように並ぶ石列が確認された。また、上層階の外壁一面に塗られていた白土や下層階の座敷に月

待山を正面とする床の間などの痕跡など、これまでの定説を覆す事実が数多く発見され、銀閣が創建時から移動していない可能性が極めて高くなったといえる。

研究方法

「わが庵は 月待山の麓にて 傾く空の影をしぞ思う」

足利義政がこの歌を詠んだ当時の面影は、銀閣と東求堂とわずかに残る苑池しか残っていないが、「都名所図絵」など複数の図絵にも記されている「向月台」や「銀沙灘」などから「観月」の名所であることは窺える。

そこで、「銀閣」を「観月」というアクティビティーとの関係から捉え直し、観月の風景をCGシミュレーションで検証した結果と、そのデータを基に東山文化の美意識について論じる。

日本文化と観月

観月行事は平安時代より宮廷や貴族の間で盛んに行われており、一年のうち、最も空気が澄んでいて月がきれいに見える旧暦8月15日の中秋の日の夜（十五夜）は、夜空に浮かぶ月を観賞しながら和歌を詠むなどの宴が催されていた。しかし、この中秋の名月を見る風習は唐の時代の中国から伝わったものとされるが、約1カ月後の九月十三夜の月見の習慣は、中国や朝鮮半島には見られず、日本独特の風習とされる。

この十三夜の観月を宮中儀式に制定したのは、遣唐使を止め、和歌ややまと絵をはじめとする国風文化を重んじ、絢爛豪華な王朝文化を牽引した宇多天皇（在位887～897）の時代とされる。

銀閣における十三夜の意味

観月を意識させる「銀閣」であるが、東斜面に沿うように建設した施設では、極めて精度の高い構想と施工力が要求される。

十五夜と十三夜での観月をCGシミュレーションすることによって、東山殿での観月のシナリオを明らかにした。そして、これらによって共通して解き明かされる建物配置と、十五夜と十三夜での観月には明らかに異なる風景が検出されたのである。

また、検証する観月視点場は、(1)銀閣下層(心空殿)広縁での観月、(2)銀閣上層(潮音閣)華頭窓での観月、(3)向月台付近での観月の三箇所とした。

以下に、検出結果を箇条書きする。

A. 観月施設を示唆するもの

- (1) 東求堂の南面配置に対して、銀閣だけが東側に縁を設け開放するなど、東西軸となっている。
- (2) 配置構成軸が磁北から約8度振れており、東正面方向が「月待山」となる。
- (3) 下層階の東側庇が西側に対して1尺ほど短く施工されており、意匠的にも東側に正面性を造っている。上層は東西に華頭窓などの意匠が施されている。
- (4) 銀閣に面する池が東面に広がり、月光を反射しやすい。
- (5) 上層階の開口部沿いに腰掛がある。

B. 十三夜の観月を示唆するもの

- (1) 銀閣下層階から眺望する月の出の位置は、十五夜よりも十三夜の方が視野軸に近い。
- (2) 銀閣下層階から眺望する池への写りこみ時間が、十五夜より長い。
- (3) 銀閣上層階から池に写る月は、十三夜の時のみ、その軌道が錦鏡池の「浮石」に重なり、池泉との関係が明らかになる。
- (4) 月の出の時刻が、十三夜は十五夜時よ

りも1時間半ほど早く、「観月の宴」が薄明かりの中で催されるため、周辺の環境とともに月を楽しめる。歌詠みなども含め風情的にも最適である。

C. 十三夜の観月を重視する根拠

- (1) 平安期に国風文化として様式化した日本固有の宴である。
- (2) 月の出の時刻に加え、統計的に雨天や雲が多い十五夜より観月会に相応しい。
- (3) 収穫の時期と適合しており、古来からの祭礼習慣に適合する。
- (4) 東山文化で重視した「幽玄」観に十三夜の観月観が適合する。十三夜は、未だ完成せずの「未生」観と同様に「相手を計り知る」感覚があり、情趣に富んでいる。

移ろいと未生の美

月の軌道による観月CGシミュレーションは、建物形状からでは見えてこない風景を再現することができた。まず、京都盆地の東山斜面に沿うように建てることは、西方に位置する桂離宮などに比して月の出を愛するには相応しくない立地である。しかし、義政が東山殿の最後の仕上げとして建設した銀閣を、観月という視点による検証の結果、極めて厳しい計算と美意識に基づく造形に加え、巧みな鑑賞手法を計画していたことが読み取れた。

また、十三夜の月に関しては、十五夜の満月の完成し切った美意識ではなく十三夜の「未生」観に義政の美の本質を推察できた。さらに、「水面の月」で「十三夜の月」を見るところに、「うつろい」の美意識を読み取れることもできる。静かな佇まいの中に醸し出される美を堪能する感覚が東山文化の諸芸に通底しており、その観点からも合致する。

上記のことから、銀閣の造形には観月作法から読み取れる東山文化の美意識が包含されていると推察することができたのである。